# 異郷の地に咲く詩の心

河原修一

雨の中で　Im Regen

ローゼ・アウスレンダー
加藤丈雄訳

公園の橡の木の下
雨の中に私はすわっている
花にくちづけし　雨は
私の傘の上で踊っている
私は静かにしている

私は夏のもたらす
この涼しさが好きだ
橡の木の天蓋が
遊んでいる噴水が
雨の挽歌が

その銀の心は
私の心を打つ

訳者の加藤丈雄によれば、ローゼ・アウスレンダー（一九〇一～一九八八年）は、当時オーストリア・ハンガリー帝国（現ウクライナ共和国）のチェルノヴィッツ（ドイツ人、ウクライナ人、ルーマニア人、ユダヤ人などが平和に共存して暮していた町）に、ユダヤ人の両親（母はベルリン出身）のもとに生まれた。第一次世界大戦時にはウィーンへ疎開し、大学在籍中に父を亡くし、経済的理由でアメリカへ渡る。同行した友人と結婚し、離婚する。一九三一年、再びチェルノヴィッツに戻るが、故郷はかつてのようではなく、反ユダヤ主義、ファシズムが台頭していた。一九三九年、友人の招きで再びアメリカにいたとき、ドイツのポーランド侵攻を知る。病弱の母のことを考え、あえて戦下の故郷に戻る。一九四〇年、ソ連軍が侵攻し、ドイツ系ユダヤ人は「敵性」とみなされる。一九四一年、ドイツ軍が侵攻し占領し、ゲットー（ユダヤ人居住区）が設置され、強制収容所に移送され、大量虐殺が行われる。この町にいた六万人のユダヤ人のうち、生き残った者は五千人にすぎない。母とともに地下室や防空壕を転々としながら、詩を書き続けた。

第二次世界大戦後の一九四六年、友人達の尽力で、単身アメリカに移住する。翌年、母の死を知る。その後、「母なる言葉であり、殺人者の言葉」でもあるドイツ語を使わず、英語で詩を書き発表する。しかし、ニューヨークは異郷であり続けた。アメリカ詩人のマリアン・ムーアは再びドイツ語で詩作することを勧めた。一九五七年、パリで同郷のユダヤ人詩人パウル・ツェランと再会したことを契機に、句読点を用いない独自の語順と分かち書きからなる形式で、ドイツ語で詩作するようになった。

文化的には自らをオーストリア人と感じ続け、一九六四年にウィーンに移り住むが、古都には反ユダヤ主義が根強く残っていた。翌年、友人や知人の多く住むドイツのデュッセルドルフに移り、一九七二年からは同地にあるユダヤ人の老人ホームに入居した。一九七八年から一九八八年の死に至る晩年の十年間は、病のためほとんど寝たきりとなりながらも、詩を書き続けた。

ここに掲げた『雨の中で』は、晩年に書かれた詩である。雨のなか、散歩に出て、公園の橡の木（カスターニエン）の下のベンチに坐っている。「天蓋」は、玉座の上にかざす飾りのついたきぬがさである。「挽歌」は、死者を悼んで棺を挽きながらうたう歌である。

様々な人の感想や批評を紹介する。

○風景の描写で、詩を練っているときの内言が、風景に投影している。

○雨が下に落ちてなくなってしまう。雨の音がきれいだから、歌にした。

○心が落ち着く。自分の感情を出すのでなく、悲しみのなかに抱かれている。

○ひどい状況の下にあるという感じがし

ない。楽しい気分が示される。
○「銀」が深い。ユダヤの民の悲しみが大っぴらにされない。心の落ち着きやゆとりが感じられる。
○映画のシーンのようである。黒い闇と雨の銀という対比が悲しみを表し、葬式のイメージがする。

雨の音を聞くうちに、雨に包まれる。戦争で亡くなった人達、知人や友人を想い出して、雨が死者を悼んで歌っているように聞こえる。非業の死を遂げた者達の魂を慈しんで慰め、悲しみの底にじっと銀のような光を湛えて。

## 山

金時鐘

こんな夜　蛇はどうしているだろう
雨の日
風の日
落ちこんだ日
蛇はどこで
どんなふうに鎌首もたげているのだろう

街がくずれた日
火に追われた日
心がひもじくて
とうとう友が狂った日
リストラを机の隅で耐えるとき
置いたままの薄い母の手紙を見やるとき
妻がおし黙り
国がわけもなく　遠いとき

蛇はどうしているのだろう
ぎろつく眼はどこを見据えて
気配の何を赤い舌はまさぐるのだろう

このおさまらぬ深い夜
百千の蛇をかかえ
噛まれた大地の毒はないのか
山よ

年譜を作成した野口豊子によれば、金時鐘（一九二九（昭和四）年～）は、朝鮮（北朝鮮）元山市で、長男として生まれた。当時、朝鮮半島は日本の植民地（一九一〇～一九四五年）だった。父は学生時代にデモに参加して故郷を追われ、中国に渡り、帰国後、朝鮮各地の港湾工事に従事し、母は朝鮮半島の南端の済州島の出身だった。

一九三八（昭和一三）年、済州島の普通学校（小学校）二年のとき、教科書から「朝鮮語」がなくなり、一九四〇（昭和一五）年、公の場での朝鮮語の使用が禁じられる。金時鐘は、皇国少年（天皇の赤子）として、日本人になるために日本の勉強を一生懸命やり、朝鮮服を着て日本語を使おうとしない父と軋轢を生じる。

一九四五（昭和二〇）年八月十五日、日本の敗戦とともに、朝鮮は解放された。町中で解放の歌が流れ、「万歳！」が叫ばれるなか、金時鐘は茫然自失として、突堤で日本の歌を口ずさみ続ける。米ソによって、朝鮮は北緯三八度線（旧日本軍管轄の境）で分断された。金時鐘は民族の憤りに目覚める。

一九四八（昭和二三）年、南北分断に抵抗する済州島民に対する虐殺事件が起きた（犠牲者三万人）。南朝鮮労働党の連絡係として活動した金時鐘は、指名手配された。父の奔走で、難を逃れ、両親と別れて、大阪市生野区に移住（密航）する。小野十三郎『詩論』に出会い、日本的抒情と訣別し、訥々しい日本語で詩作し、自らを培って来た日本語に報復しようと決意する。

朝鮮戦争（一九五〇～一九五三年）特需で日本経済が潤うなか、一九五二（昭和二七）年、軍事物資輸送を妨害する吹田事件が起きた。金時鐘は起訴されたが、無罪となる。一九五三（昭和二八）年、在日詩誌を創刊する。

一九五五（昭和三〇）年、第一詩集《地平線》を出版する。翌年、在日詩誌の仲間と結婚する。

一九九八（平成一〇）年、特例で、済州島に墓参りをする。二〇〇三（平成一五）年、韓国大統領が島民に謝罪した。二〇〇八（平成二〇）年、済州島に慰霊堂が建てられた。

ここに掲げた『山』は、第六詩集《化石の夏》（一九九八年）に収められた詩である。

様々な人の感想や批評を紹介する。
○なぜ題名が「山」なのかわからない。
○「蛇」は悲しみ、苦しみ、恨み、呪いなどの自分の中にある負の感情（激情）を表しているのではないか。
○第二連、第三連はじっと耐えている印象があり、「山」に喩えられている。
○第三連は妙にリアル（具体的）であり、他の部分は何かを喩えている。
○「山」は自分を喩え、「蛇」は自分の中の感情を喩えている。最後の連は、客観的に自分を見ている。
○怒りを溜め込んでいて、どこにぶつけようもなく、爆発寸前である。

在日朝鮮人として、違和感のある日本語で日本人から差別され、朝鮮語が不自由なことで本国人から差別され、同じ朝鮮民族でありながら、北朝鮮と韓国の分断が持ち込まれるなかで、居場所がない。両親や郷里の人々に負い目を覚えながら、在日を生きる。

「百千の蛇」は同胞のじっと耐える恨の心でもあり、「山」は恨の心で膨らんだ祖国朝鮮の魂でもある。

（かわはら・しゅういち／日本語学）

――参考文献――
□『雨の言葉　ローゼ・アウスレンダー詩集』加藤丈雄訳（思潮社）
□『〈在日〉文学全集5　金時鐘』（勉誠出版）

# 注連縄におまじない

## 出雲大社で100人インタビュー

三島香織・三原千加子
（取材協力）濱﨑まどか

私たちは島根県で生まれ、ずっとこの地で育ってきました。出雲大社がある出雲市大社町の隣町に住んでいます。というわけで、お正月には毎年、出雲大社に初詣に行きます。

ところで、小さい頃から不思議に思っている光景があります。神楽殿の前を通ると、いつもたくさんの人が注連縄（しめなわ）に向かってお金を投げていました。出雲大社の神楽殿には長さ十三・五メートル、重さ五トンの日本一大きな注連縄があります。注連縄にはいつもぎっしりとお金がささっていました。私もさしてみたいと思い、小さい頃は真似してよくやったものです。何度も何度もささるまで挑戦していました。

小さい頃は投げることが楽しく、ささることが嬉しかったので、どんな意味があるかなんて考えたことがありませんでした。良いことがあると噂で聞いたぐらいです。他の神社の注連縄にお金がささっているのは見たことがありません。どうしてここだけお金がささっているのか気になっていました。今回、小さい頃から疑問に思っていたこと、「なぜ注連縄にお金をさすのか」について詳しく調査することにしました。

### いざ出陣！

なぜ注連縄にお金をさすのかについて調べるには、やはり実際にやっている人に聞くことが一番。どうせ聞くなら、たくさんの人に聞いたほうが良いだろう。そこで、百人にインタビューしようと決意し、出雲大社にいざ出陣！　あいにく当日は雨で観光客が少ないのではと思いましたが、そんな心配は必要ありませんでした。

とはいえ、初めのうちは注連縄にお金をさしている人はまばらでした。私たちも最初はとまどいながらインタビューをしましたが、みなさんが親切に答えてくださるので、だんだん緊張もほぐれてきました。その後、徐々に観光客も増え、調子が出てきて、午前五十人、午後五十人という具合に、無事百人にインタビューすることができました。

みんな楽しそうにお金を投げておられました。ささった瞬間には歓声が聞こえてきます。この日は結婚式が七組あったそうですが、結婚式に出席された人も投

げておられました。やっているのは若い人が多いのかと思っていましたが、意外にも年配の方も楽しんでやっておられ、幅広い年齢層に親しまれているということがわかりました。

## なんで投げてるの？

百人にインタビューした結果、なぜ注連縄にお金をさすのかという質問には、半数以上の五十九人がご縁、ご利益、良いことがある、願いが叶うといった、縁結びの神である出雲大社にちなんだ効果を期待しておられました。「一回でささるといいことがある」、「願い事を言いながら投げると叶う」という人もいました。なかには「友達の娘さんのために」という人もいました。

自分が投げたお金がささっていたお金にあたり、落としてしまうことがあります。他の人の幸せを逃がしてしまった気がして申し訳ない気持ちになります。私たちも何度も落としてしまいました。多いときには一度に四、五枚も落ちてきます。落としてしまったお金を自分の幸せを願うかのように一生懸命さし直しました。ところが、「投げていて五円が落ちてくるとご縁がありそう」という人もいたので、そういう捉え方もあるのだなと、なぜか感心してしまいました。

意外というか予想通りというか、お金を投げることをその場で知ってやってみた、他の人の真似をしてやった、という人が三十五人もいました。「ささっているのを見て、お賽銭感覚でやった。水の中に入れるのと一緒だよね？」という人、「みんな投げるのがヘタ。自分ならすぐにささると思って試してみた」という自信満々な方もいらっしゃいました。

四時間も観察していると、いろんな人に出会います。あるおばあちゃんは、なかなかささらず、何十回も挑戦しておられましたが、結局ささらずそのまま帰っていかれました。その頑張っておられる姿を見て、心の中でつい応援してしまいました。これとは対照的に、さしている人をじっとみつめている方もいらっしゃいました。インタビューしてみたところ、「これは何のためにやっているのか」と逆質問されました。「注連縄とは神聖なもの。お金をさすことはよくないと思う。僕はやらない！」と言っておられました。この人の注連縄についての講釈は二十分ほど続きました。

昔は注連縄ではなく、本殿の柱の割れ目にお金をさしていたと教えてくださったおじさんもいました。実際、本殿の門まで行ってみました。なかなか見つかりませんでしたが、よく探すと数カ所ささっていました。とても古いもののようです。注連縄と同じ感覚で柱にさしていたのかなと思いました。

## 世界の出雲大社

インタビューした百人の中には、外国の方もおられました。アメリカからの留学生が先生と一緒に来ておられ、楽しそうに投げておられました。なぜ投げているのか聞くと（もちろん英語で聞きました）、“For lucky”と答えてくださいました。

ほかにも、およそ四十分もの間、延々とやり続ける中国人の五人組グループにも出会いました。自分のお金をさそうとして、すでにささっているお金が何度も落ちてきましたが、そのお金も拾って投げておられました。とにかく、飽きもせず、何度も何度も投げておられました。そのうち、私たちがインタビューしていることに気づき、さすことは良いことなのか、悪いことなのかと聞いて来られました。日本人だけでなく、外国の方にも親しまれていて、やっぱり出雲大社はすごい。

ご利益、ご縁があるという人に、それを何で知ったのかを尋ねてみました。ガイドブック・本・テレビ・ネットを見て知ったという人が二十九人いましたが、なかでもガイドブックという方が多く、二十三人でした。実際にガイドブックを持っている方がおられたので見せてもらいました。そこには、「神楽殿の注連縄

にお金をさすとご利益があるとか」と書いてありました。「福が来る」と書いてあった本もあるそうです。

私たちもいろいろなガイドブックを調べてみました。すると、「投げたお賽銭が注連縄にかかるとご利益があるといわれている」とか、「コインを投げてうまく下げ緒のワラにはさまれば願いが叶うはずだが……」とか、確かに書かれています。なかにはお金を投げている写真が載せてあるのもあります。私たちは噂や口コミから広まったものだとばかり思っていましたが、ガイドブックなどに書かれているということをこのインタビューで初めて知り、とても驚きました。

## やっぱり出雲大社はすごい！

投げた銭は何円ですかという質問には、十円という回答がほぼ半数の五十一人でした。十円を投げた理由は、一番多くささっていたから、十分にご縁があるように、ということでした。次に多かったのが五円でした。五円にはご縁があるようにという語呂合わせがあるので一番多いかと思っていましたが、実際は二番目でした。百円というリッチな方もおられました。私たちも実際に挑戦してみましたが、一番ささりやすいのは十円でした。一円は軽いのでささりにくく、お勧めできません。

インタビューした百人は、どこから来られたのか。一番遠いのは北海道でした。人数が一番多かったのは東京からで十五人、次いで兵庫からが十二人でした。県内からの訪問者は四人しかおられませんでした。もっと県内から来た人が多いのかと思っていましたが、県外からのほうが圧倒的に多く驚きました。そして、大半の方が初めての訪問ということで、やっぱり出雲大社は一度は行ってみたい観光地なのかなと思いました。雨の日にもかかわらず、遠くからこんなにたくさんの観光客が訪れるなんて、やっぱり出雲大社はすごい。

■外国人観光客にもインタビュー。

## 注連縄って何？

ところで、そもそも注連縄とは何なのでしょう。注連縄とは神聖な場所に張り、不浄なものの侵入を防ぐために用いられる縄のことです。「注連縄」のほか、「標縄」「七五縄」「七五三縄」といった漢字が使われます。また、その形態もさまざまで、形によって「前垂注連」「大根注連」「牛蒡注連」「輪飾り」などの呼び名があるそうです。注連縄が用いられる場所は、神前や社殿、祭場、鳥居、神輿（みこし）、神棚などであり、祭の間だけかける場合と、一年中かけている場合があります。現在では装飾的な意味あいが強くなっているということですが、やはり注連縄は神聖なものであるため、お金をさすという行為はいかがなものか、……ちょっと考え込んでしまいます。

神社の方にうかがったところ、「注連縄は神社のご神域を示すものであって、重要な役割を持っています。ですから、その注連縄に賽銭を投げ込むことは決して良いことではありませんし、神社としても喜ばしいことではありません」との答えが返ってきました。

注連縄にお金を投げるようになったのは神楽殿新築の昭和五十六年以降のことだと思われますが、正確な時期はわかりません。あんなにたくさんささっているお金をどうするのか気になったので、これも神社の方に聞いてみたところ、ささっているお金は八月に行われる教団大祭前と、十二月の大掃除の際に収集し、お賽銭と一緒にするとのことです。

出雲大社の注連縄は島根県飯南町にある勧農講社頓原支部によって奉納されています。この注連縄を作るには延べ約六百人の手間がかかり、およそ二カ月の時間を必要とします。稲藁の確保にとりかかってから完成までには三年かかります。

勧農講社頓原支部支部長の菅恒義さんに、出雲大社を訪れる人が注連縄にお金を投げることについてどう思っていらっしゃるのかお聞きしたところ、「お金を投げる人は年々多くなっています。それは観光客の方が、神様に願いが伝わるようにと、自分の気持ちを託してやっておられるので、とめることはできないと思います」とおっしゃいました。

（みしま・かおり＊みはら・ちかこ／文化資源学系二年生＆はまさき・まどか／英語文化系二年生）

# 和らぎ処 紡

## 高松奈津子さんに聞く

中重 彩

「料理、酒、場所はあくまでも、ゆっくりくつろいでもらうためのアイテムのひとつなんです」――出雲市平田町の木綿街道で「和らぎ処 紡」を営む高松奈津子さんを訪ねた。好きな人とゆったり気持ちいい時を過ごしてもらう場所「紡」。おいしい料理は和らぎ空間の演出のひとつなのだ。

高松さんのお店のモットーは「身土不二」。だから、メニューに並ぶのは地元の野菜が中心だ。魚や肉は引き立て役にまわる。「自分の身体を、そして心を育てたのは地元のものだから大事にしないと」。お酒も日本酒が中心だ。これは、米と水でつくる本来の酒の味を楽しんでほしいという考えからだ。

和の雰囲気漂う落ち着いた店内は、ゆったりとした時間が流れている。訪れたのはかんかん照りの夏休み一日目。クーラーは無くても、すぐ後ろを流れる船川、風鈴の音、かすかに聞こえてくるBGM、と涼しげな演出とともに、やわらかい風が通る。

### 店内に潜む名脇役

築百二十年以上の古民家を改装した店内には高松さんの個性が光る。壁やカウンターには桶やふね（酒槽のこと。酒を搾るための箱形の槽）など酒づくりの道具が再利用され、店の雰囲気にうまく溶け込んでいる。知り合いの大工さんがボランティアでしてくれたそうだ。これに気づくお客さんはどれくらいいるんだろう？ わかった人はすごい！ ここは人と人とのつながりで成り立つ場所だ。

家具も古風なものが並ぶ。昔ながらの職人さんの知恵や手間が詰まったものだ。奥の座敷にあるちゃぶ台は、何十年も昔から色々な人の手に渡ってきた。「そういうものには人のにおいがするし、エネルギーを感じる。古いものの良さ、大事さを伝えていきたいと思わせてくれる」。

ユニークだなと思ったのは、カウンター席の椅子。五つ全部つなげると桶の底板だった。端が丸いのも納得！

トイレも和み処。手書きの詩が飾ってあり、スリッパなどの小物ひとつひとつにまで気が配られている。ここの壁も桶の底板で出来ており、よく観ると桶の円い形がわかる。洋式トイレの和の空間。取材に同行したトイレマニアの友達も、好きなトイレと大絶賛！

高松さんは休日、ベベ貝捕りに行ったり、畑の世話をして過ごすそう。畑は、ゴロゴロと石が落ちている場所を開墾することから始まった。今年は、トマト、

ナス、キュウリがなった。捕った貝や野菜は次の日のメニューに変わる。仕事とプライベートの境は無いんだろうな、そんな印象を受けた。大好きなお酒をのんびりと昼から飲むこともあるそう。自分のことを「のんだくれ」と言って照れながら笑う。

## 冬になると蔵人に変身!?

実は、高松さんにはもうひとつの顔がある。十一月になると、高松さんの仕事場は斜め向かいの「酒持田本店」に移る。ここでお酒をつくるようになって六年目。今では、香り高く女性にも飲みやすい「萠」という酒を任せられるほど。ここで働くようになった年にできた酒であることから、名付け親に指名された。乾杯の場に似合う、華やかでやわらかい名前を選び、萌え木からとった「萠」。酒蔵で働く五人のうち女性は高松さんただ一人だ。「今では三十キロの米袋を軽々担げるようになりました。慣れたら力はつきますよ」。ほんわかしたやさしい雰囲気を醸し出す高松さんから、頼もしさを感じた。

二十四時間拘束される酒づくりは、本当に忙しく、神経ピリピリの状態が続く、きついものだ。冬の間、斜め向かいの家に戻るのは、郵便物を取りに帰るときくらいだと言う。「酒づくりは子どもを育てるのと一緒。泣いている子どもを放っておいて、どこかに行くなんて考えられないでしょう?」

時間が経つにつれ、少しずつ麹との会話が出来るようになってきた。でも、今日出来ても次の日は出来ないこともある。「本当に、生き物相手なんです」。内に秘められた熱い気持ち。こんな意外な言葉も聞いた。「毎年、毎年、やる度にわからないことも増えていく。やりがいを感じるなんてまだ言えない」。謙虚な人柄が見えた。つくっている人の感情で味が変わるとも言われる、酒。機嫌悪そうに仕事をしていると先輩職人から「そんなんじゃおいしい酒はできんぞ」と言われた。深い世界を追いかけている、そんな風に私には映った。お客さんを酒蔵に案内をした際、「これからは、最後の一滴まで大事に飲むようにします」と言われ、とてもうれしかったそう。「生き物が生き物を手にかけ、飲む人に送り出す」。酒づくりの醍醐味はここにある。

■床の間。円いのは桶の箍(たが)。

■桶板を利用したトイレ。

自由の利かない酒づくり、すべて自分にかかっている「紡」、二つのバランスがうまく保たれているから続けられる。「もし、どちらかを一年中やっていたなら、続けられていないかもしれない。二つあるからちょうどいい」。

## 運命を変えた出会い

冬は酒づくり、それ以外は自分のお店と、地域に根付いた仕事をする高松さんは、大阪府出身の元新聞記者。「アスファルトだらけの中で育ちました」。初めて出雲にきたのは、支局への転勤がきっかけだ。それ以前は奈良で働いており、毎日が慌ただしい生活を送っていた。新聞記者は外での仕事が主。食事はひとりでコンビニのお弁当やチェーン店でささっと済ますのが日常だった。

仕事のハードさに疲れていたそんな中、ふと一軒のレストランに入ったのがそもそもの始まり。野菜本来の味を生かした心のこもった料理は心にしみた。そ

■ふねと桶を利用したカウンターと椅子。

傍ら、自分の知りたいことを取材していくうちに、だんだんと興味が増していった。例えば、漁師さんはどんな生活をしているんだろうと思い、話を聞きに行った。お願いして船に乗せてもらったりもした。さっきまで泳いでいた魚は、スーパーで見る切り身とは比べものにもならなかったと言う。

「お前は魚をさばけるか」

「できません」

「だからいけんのだ」

そんなやりとりがきっかけで、友人も呼んで魚のさばき方の講習会を開いたりもした。

都会にはない生活がここにはある。汗だくになって、泥だらけになって働く、そんな人がいることを意識することは今まで無かった。知り合いの漁師さんが亡くなったとき、漁は命懸けという言葉の意味をひしひしと感じた。その命懸けで捕った魚をいつも食べていた――。

「自分は何も知らない。これではいかん」。そんな思いにかられた。同時に、自分も知らなかったことを現地で伝えていきたい。そんな気持ちも生まれてきた。

## 決意と始動

「出雲で何かしよう」と決め、会社を辞めた。まず最初に、第一次産業に関わりたいとの思いからトマト農家や牧場でアルバイトをした。雇用保険の給付も終わる頃、より夢に近いものをと思い、以前行っていた岡山の民宿で住み込みで働くことを決める。出雲の家は引き払い、荷物は全て実家へ送った。

民宿で学んだことは、料理のつくり方のみではない。一番影響を受けたのは、「考え方」だった。人間は食べることで生きている。恵み、命を大切にし、食べ物に感謝する気持ちを持とう。いただきます、ごちそうさまの本来の意味、生き物の命を取り上げているひどさについても気づかされた。ここの営業は山奥のため、春から秋限定。「冬はどうしようか」。

■カウンターの下。ここにも桶板が使われている。

ふと、日本酒づくりは冬だけやっているということを思い出す。「自分の目で現場を見よう」。知人の紹介で、酒持田本店へ行くことになる。

## 大事なことは流れの中で選ぶ

時折、出雲弁が飛び出す高松さん。出雲での暮らしはもう九年目になる。「ここの魅力は？」と訪ねると、「海、山、田んぼがある。大工さん、左官さんもいる。とにかく現場が近い。狭い世界なので顔が見えるし、話ができる。それは何でもあるということ」。育った環境が市街地だった分、緑に囲まれた生活はとても新鮮だったそう。会社を辞めてからの方が人との接点が増えたと話す。「人の大事なものと接していると、自分の一番大事なものに気づかされる。家族、ふるさと――」。一、二カ月に一度は大阪府の実家に帰る。「離れて暮す分、やっぱり心配」。

最後に、これからについて聞いてみた。「流れるままにいくこと。どんな人のアドバイスにも耳を傾けて、自分の気持ちに素直でいれば、大切なものは自然と見えてくる」。高松さんらしい一言だ。

（なかしげ・あや／文化資源学系一年生）

■

こで感じたのは、「ひとりで過ごす食事なのにすごく満たされている。食事ってすごいな」。食事のパワーを痛感した。でも、その時にはまさか自分が店を出すとは考えもしなかったと言う。その後も、時々その店を訪れたり、同じ思いで料理をつくる岡山県の山間にある民宿に旅行に出かけたりした。そうした中で転勤が決まり、出雲に来ることとなったのだ。

## 現場だからわかること

出雲では、第一次産業に携わる人への取材が中心だった。その中で、「カルチャーショック」を覚えたそう。仕事の

# 佐川末廣堂（安来市）
# 懐かしのアイスキャンデー

山尾中希

安来市安来町に「末廣堂」という和菓子屋さんがある。地元の人たちには「さがわ」という愛称で親しまれており、私にとっても祖父の家が近所だったこともあり小さい頃から馴染みの店である。末廣堂では五月のゴールデンウィークごろから九月末までの夏季限定で、昔ながらのアイスキャンデーを製造・販売している。その末廣堂の四代目である佐川光邦さんにお話をうかがった。

末廣堂は創業百十年以上という歴史のある店であり、現在は四代目の光邦さんと三代目である父・友紀さんを中心に和菓子を製造している。アイスキャンデーは昭和十九年から製造を始め、味も製造工程も昔ながらの方法で手造りされている。

店舗に入って左手の一角には抹茶、いちご、コーヒー、あずき味のアイスキャンデーが並んでおり、今年からマンゴー味も仲間入りした。これらのアイスキャンデーは本物の抹茶、コーヒーやピューレ状のマンゴーを使用している。あずき、抹茶味に使われている小豆は、和菓子屋ならではの風味である。いちご味が一番人気で、子どもから大人まで幅広い年代の方に好まれている。それにあずき、抹茶、コーヒーと続く。

和菓子屋にとってお菓子の売り上げが落ちる七月、八月に何か他にできることはないかと考えたのがアイスキャンデーのはじまりだった。二代目（光邦さんのお祖父さん）が四国に必要な機械を買い出しに行ったが、まもなく軍に召集され、安来に機械だけ送ってそのまま広島から出兵し、帰らぬ人となった。

安来にはアイスキャンデーの機械だけが届き、最初は機械の使い方もアイスキャンデーの作り方も分からず大変だったという。そこで安来に残っていた家族たちが旧安来町内のアイスキャンデー屋や米子市の同業者に作り方を教えてもらい、副業として販売しはじめた。現在も当時の機械を使い続けており、砂糖や練乳などの原材料もそのままである。

シロップ状にしたアイスキャンデーの原液を銅板製の型に入れ、マイナス三十度の塩化カルシウムの冷却水に漬け込む。すぐ割り箸も入れ、抹茶・あずき味は小豆を入れる。出来上がった時に箸が斜めになっているのも末廣堂ブランドら

■アイスキャンデーを製造する型枠。

しく、食べやすいと好評である。十分もしないうちにシロップは凍り、全体を水に漬けながらキャンデーの型から外すともう出来上がり。私たちも話をうかがいながら冷却水に指を入れさせてもらったがとても冷たく、作業をしていた友紀さんの手は真っ赤で、まめもできており、作業の大変さがよく分かった。

昔懐かしい自転車に大きな氷の入った木箱、裸売りのアイスキャンデーというスタイルは電気冷蔵庫の普及により現在では見られなくなった。私の祖母も「ちょうどおやつ時になると自転車でアイスキャンデーを売りに来られてね。みんなで食べたものだよ」と当時を懐かしんで話してくれた。当時使われていた木箱や旗などはもう残っていないが、刃物祭りなどのイベントでは昔の形を現代風にアレンジした復刻版として登場することもある。

■（左上）アイスキャンデーの原液を型枠に入れる。（右上）割り箸を入れる。（右下）凍結完了。冷却水から取り出す。（左下）型枠からアイスキャンデーを取り出す。

包装も裸のアイスを新聞紙に包んで持ち帰ってもらっていたのから、アイスをプラスチックフィルムの袋で一つ一つ包装する形に変化した。だが、現在でもたくさん買った方にはさらに新聞紙で包装している。新聞紙は保冷効果も高く、空気を通さない油紙であるので、三時間ぐらいは保冷剤がなくても溶けずに持ち帰ることができる。また、個々のパッケージには安来市のイメージキャラクターである「あらエッサくん」のイラストが描かれており、安来らしさ満載だ。最近はクール便などで遠方のお客さんにも届けることができ、喜ばれているという。

光邦さんは「昔は子どもたちが近所の公園で遊んだ帰りに小銭を持って買いに来たが、最近は少なくなってきている」と残念そうに話されていたが、盆などに四十～七十代の人が帰省し、「さがわのキャンデーを食べると安来に帰ってきた気がする」という声が嬉しく、やっていてよかったと思う瞬間だとにこやかに話してくださった。

■（上段）包装機械。右側にはレトロな木箱が。（下段）四代目光邦さんと記念写真。

大手の菓子業者が様々な種類のアイスを売り出した結果、旧安来町内に九軒あったアイスキャンデー屋が次々となくなり、現在では末廣堂一軒になってしまった。専業のアイス屋が続かないのは残念だが、「味も製法も変えるつもりはない。それが夢であり目標」と話してくださった光邦さんからは、これからもこのアイスキャンデーの味を守り続けるという意気込みが伝わり、とても印象的だった。

「百円でおつりが来るのもポイントだしね」と笑って話してくださるおちゃめな一面も、さがわのアイスキャンデーが愛される秘訣なのでは？――と思いました。

（やまお・まき／日本語文化系一年生）

# 青山蒲鉾店（松江市）

# こだわりの あご野焼き

松尾美紗

私の家の近くに、あご野焼きで有名な青山蒲鉾店がある。しかし、私はお店に行ったことも、商品を買ったこともなく、ただ前を通り過ぎるだけだった。私は今回の取材で初めて青山蒲鉾店を訪ねた。

青山蒲鉾店は松江しんじ湖温泉駅から歩いて二、三分のところにあり、古い町並みの残る静かな通りに面している。ひっそりとした佇（たたず）まいに店の性格が表れているようだ。

店に入るとすぐ目の前にショーケースがあり、その中に様々な商品が並べられている。野焼きはもちろん、すまき、平天、ごぼう天、……それに板付き蒲鉾もある。どれもが手づくりと聞いたときは、「本当に？」と少し疑ってしまうほど形がきれいである。

製品をつくる作業場は奥の方にあるらしい。店員の方に案内されて売り場の片隅の扉を開けると、びっくりするほど長い廊下が現れる。それは、四、五十メートルもありそうな長さである。その廊下を抜けるとやっと作業場が見えてくる。

あご野焼きとは、あごを主原料にした魚肉練り製品で、出雲地方特有のものである。あご野焼きの「あご」は飛び魚のことである。この飛び魚、九州辺りで獲れるものは小さくて脂も少なく、主に干物になるが、島根県沖で獲れるものは脂が乗り、あご野焼きに最適とされている。

青山蒲鉾店は本物のあご野焼きにとてもこだわっている店である。日本の蒲鉾づくりは、もうずいぶん前から、輸入冷凍すり身を仕入れて、そこからつくりはじめるのが常識となっている。しかし、青山蒲鉾店は丸の魚の状態から始める。丸ごと魚の形で仕入れるということは、一切ごまかしがきかないということである。

あご野焼きに欠かせないのが「地伝酒」である。地伝酒とは、出雲地方で古くからつくられていたお酒のことである。もち米を使ってつくっていたため、戦時中にぜいたく品として扱われ、つくられなくなってしまった。この地伝酒をあご野焼きに入れると魚の風味が引き立ち、生臭さを消すと言われる。

一九八〇年代になって、もう一度地伝酒を復活させようという動きが出てきた。そして、十年の試行錯誤を経て地伝酒の復刻版を完成させた。今、青山蒲鉾

店ではこの地伝酒をあご野焼きに使用している。

青山蒲鉾店の蒲鉾づくりは、魚の頭と内臓を取り除くことから始まる。一匹一匹丁寧に手作業で取り除いていく。そして、機械を使って魚の骨と鱗を除去し、すり身をつくる。そのすり身をアルミの棒に一本ずつへらで巻き付けていくのだが、実際に間近で見ていても手つきが速すぎて、何をしているのか、いまいちよく理解することができなかった。一本一本の重さは、秤を使わず勘で調整している。

焼く工程でもまた職人技が光っていた。青山蒲鉾店ではもちろん炭火で焼く。じっくり中まで火を通さなければ保存が難しい。焼き加減は色等で判断するのかと思いきや、実際には「突きたて」という道具で突いたときの弾き加減で判断するのである。少しだけ体験させてもらったが、焼きはじめのものとそろそろ出来上がりのものとでは、本当に針の弾きが違っていた。素早く一本一本弾き具合を見ながら焼きあげていく奥さんの美喜子さんに思わず見とれてしまった。

青山蒲鉾店では、揚げ物もつくっている。平天、ごぼう天、チーズ入り丸天などである。揚げ物にも青山蒲鉾店のこだわりが見えた。揚げ物に使用する油は出雲市でつくられている国産菜種油である。この菜種油は透明がかった色ではなく、きれいな黄色をしていて匂いもある。自然の油で自然なすり身を揚げる青山蒲鉾店の揚げ天は、出来上がりがきれいな薄いきつね色になる。

ごぼう天はつくり方にまず驚いた。薄く伸ばしたすり身の上にごぼうを乗せ、包丁ですばやくすり身をごぼうに巻きつけていく。あまりの速さにカメラのシャッターが追いつかなかった。十四代目当主の昭さんの職人技である。

このごぼうにもこだわりがある。地元の秋鹿ごぼうを使用している。秋鹿ごぼうは柔らかく、ごぼう天にしたとき周りの生地と同じ食感で噛み切れる。

揚げたての平天とごぼう天を試食させていただいた。今まで食べたことのある平天・ごぼう天とは比べ物にならないくらい柔らかく、やさしい味が口の中に広がっていく。油もまったくしつこくない。もちろん、焼きたてのあご野焼きも試食させていただいた。本当に魚本来のおいしさが口の中いっぱいに広がる。

青山蒲鉾店はこだわりがいっぱいの店である。こうしたこだわりを持ち続けるには家族の支えが大切だ。家業として、家族が一丸となり力を合わせてやっていかなければ長続きしない。こだわりの裏にはたいへんな苦労があるのだ。

今、あご野焼きを一本一本手作業で、炭火で焼き上げるのは青山蒲鉾店だけである。決して楽ではないこの商売を支えているのは何だろう。美喜子さんは「機械化してしまったり、本物のあご野焼きをつくらなくなってしまうと、何かに負けてしまったような気がする」と話してくださった。

（まつお・みさ／文化資源学系一年生）

■（上段）あご野焼きをつくる昭さん（左）と息子さん。（下段）「突きたて」を使いながら野焼きを焼く美喜子さん。

■（左）ごぼう天の成形作業。撮影のために、ちょっと手を止めてもらった。（右）平天を揚げているところ。

# 街のおもしろ文化観察学入門

## その参

宇野あずさ
小室喜美子
富田美那子

連載も第三回となりました。今回は、文化資源学系二年生三人で、松江駅から寺町、竪町、横浜町を回り、さらに雑賀町へと向かいました。

松江駅周辺から街観察スタート！　駅前を歩いていると、「関西煉炭有限会社」と書かれたお店を発見！　しかし土曜日だったため、お店はお休み。横に回って見ると何だか大きな工場のような建物があり、黒くて丸いものがずらりと並べられているのが見えました。

「一体どんなお店だろう？」

そう思いながら私たちは後日改めて訪問することにし、その場を後にしました。

そして、線路沿いに西へ向かいました。しばらく歩いていると高架下の金網に街の案内地図がずらりと設置されているのを発見。何で一カ所に六枚もあるのか不思議です。よく見ると、どの地図にも民家は載っていないことに気付きます。商店や会社の案内版なので民家は省略してあるのです。それぞれの地図にも特徴があり、縮尺通り建物が配置された地図もあれば、縮尺を無視して隙間なく店を並べた地図もありました。「この建物もう無いはずだけど？」というのもありました。

■（上段）案内地図。（下段右）アベック通り。（下段左）練炭屋の工場。

### 昔のデートスポット……。

交差点を渡ってさらに西に進むと「アベック通り」という名前の通りがあります。カップルのデートコースをイメージしますが、実際は高架下の、昼間でも人通りの少ない寂しい通りです。しかし昔は、この通り沿いに「松江国際」という映画館があり、飲み屋も多かったので人通りも多く、にぎわっていたそうです。

アベック通りを通り過ぎ、ちょっと人参方にも寄ることにしました。例の道路をまたいだ屋根を通り過ぎると……。すると、変な形をしたカーブを見つけました。曲がり角を一カ所削ればいいものを、少しずつ角度を変えて三回も角が削られています。なかなか見ないタイプのカーブで、「丸くするつもりだったのかな？」とみんなで話しながら、しばし観察しました。

カーブの奥はかなり広い駐車場で、昔ここに人参方保育所があったそうです。今は門柱だけが残っています。人参方保育所は昭和三十九年に開所し、平成十一年に移転して白潟保育所になりました。偶然、観察隊のメンバーの一人が人参方保育所の卒園生で、「懐かしいなぁ」と言いながら、園舎、園庭があった位置を

■（上段）人参方通用門の屋根。（下段右）幸神社と久志母里社。（下段左）妙な形のカーブ。

説明してくれました。園児のとき定期的にお参りをしていたという小さな祠(ほこら)も、ちゃんとそこにありました。幸神社と久志母里社が合祀されているそうで、松江藩に縁があり、人参方の鎮守の神様として祀られているそうです。七月のお祭りでは園児たちが神輿(みこし)を担いで町内を回っていたそうで、昔からこの場所で人々の生活を見守り続けているのだなと思いました。

## 柱を探して……。

保育所を後にして、もと来た道を引き返すと、またあの路上の屋根です。前回の連載でも取り上げた「人参方」の通用門跡です。「この門の柱は両側の家の中にある」と聞いていたので、「それをぜひ見たい！」と思い、前回もお話をうかがったという右側の質屋さんにおじゃましました。

しかし柱は壁で覆って隠してあるそうで、残念ながら見ることはできませんでした。その柱は話によると、四十センチ前後の立派なもので、おかげで地震があっても家はビクともしないそうです。今の家を建てるために屋根を切り落としたそうで、元々、屋根はもっと長かったのだということが新たに分かりました。急な訪問にもかかわらず大変丁寧に説明していただきました。最後に『のんびり雲』第1号をお渡しして失礼しました。

■（右）人参方保育所の門の跡を確認する観察隊メンバー。（左上段）昔の園庭風景。（左下段）昔の門。

## 紋、紋、紋章！

竪町商店街にさしかかると、「舟木紋章店」という店名と家紋のようなものが入り口に描かれているお店を見つけました。『のんびり雲』第1号で取り上げた野波洋傘店のすぐ近くです。気になったので入ってみることにしました。

すると、お仕事中だったにもかかわらず、お店のことや紋章について、詳しく説明してくださいました。

このお店は明治の初めごろに創業し、今のご主人が三代目だそうです。現在、島根県の紋章屋は三軒のみで、そのうちのひとつがこのお店です。昔は松江市内だけで四軒はあったのだということです。

紋章店は、かつては一年を通して季節ごとの仕事があったそうです。春は卒業式や入学式の季節なので、母親が着る着物の背中などに紋をつけ、夏には、盆に向けて仏壇を覆うための「打敷(うちしき)」という、家紋の入った布を作ります。秋から冬にかけては、婚礼用の留袖(とめそで)に紋をつけます。紋章屋では新たに紋をデザインすることはめったにないそうです。紋帳という様々な形の紋が載っている本を見て作るか、またはお客さんが見本を持って来られたときには、それを見て作ります。

紋章を着物に付けるやり方のひとつに「刷り込み」があります。「刷り込み」は、紋章の型紙を、着物の上に置いて上から墨を塗り、模様を写します。この型紙は今ではプラスチックのものを使いますが、昔は渋紙で作られたものを使っていました。

写した後、細かいところを見本通りに筆で描いていきます。動物が描かれているような複雑なデザインのものよりは幾何学模様のもののほうが、正確さが問われ難しいそうです。刷り込み以外のやり方では、家紋を糸で一針一針縫うやり方や、ミシンで刺繍するやり方があるそうです。

「打敷」とは盆に仏壇に飾られる、帯地でできた敷物のことで、その家の家紋が入れられています。パーツごとにボール紙で型紙を作り、それぞれに綿を貼ったら、その上から綿を包むようにちりめんの布を貼ります。それらを組み合わせて家紋を作り、打敷に貼り付けます。できあがった打敷の家紋は立体的で、刷り込みで入れた家紋とはまた違った味わいを持っていました。

舟木さんがお仕事で使われている道具も見せていただきました。硯(すずり)、「ぶんまわし」と呼ばれるコンパス（普通は鉛筆が付いていますが舟木さんのは筆が付いてます）、細部を描くための小筆、直線を描くためのものさしとガラス棒、型紙を彫る小刀、「きずみ」という片目にはめて使う眼鏡などです。また、お店には

■舟木紋章店正面。

■（上段右）紋帳。（上段左）打敷。（下段右）道具類。（下段左）作業中の舟木さん。

舟木さんが炊飯器を改造して作った加湿器もありました。

昔からこうした道具は手作りされていて、家紋職人になるための修行はまず道具作りから始まっていたそうです。

現在では紋の主な需要先である着物が、値段の高さや着る機会の減少といった理由で落ち込んだこともあり、昔のようには注文が入ってこなくなったのだといいます。また、後継者の問題もあります。舟木さんがかつて京都で修業をした当時、同じように修行を行っていた人は五十人ほどもいたそうですが、今では非常に少ないとおっしゃっていました。紋を描く作業というのは非常に細かく、若くてどんなに目がよくても難しいのだそうです。そのような難しい作業は、若いうちに五年から十年という長い時間をかけて修行をしなければ身に付きません。紋章という文化がこれからどうなるのか、たいへん気がかりです。

## 変な石発見！

紋章屋を失礼して横浜町に入ると、水路わきの石垣の下に臼の形をした石があるという妙な景色に出くわしました。調べてみるとこの臼の形をした石は「如泥石」というものであることがわかりました。

「如泥石」は現在でいうテトラポッドです。江戸時代から大正時代にかけて大橋川や嫁ヶ島、宍道湖岸の整備に使われました。直径と高さが同じで、特徴は上下の面に彫られた円形の溝です。これは、「波を吸収し、消す」という役割があるそうです。

考案したのは、松平不昧公お抱えの工匠、小林如泥とされています。灘町に如泥の石碑があると聞いたので行ってみると、確かに「小林如泥居住之地」という石碑が建っていました。

後日、観察隊メンバーの一人が布志名の宍道湖端へ行き、「如泥石」が五つ並んでいるのを発見しました。当時はたくさんの如泥石がきれいに並び、布志名の湖岸を護ってくれていたのだろうと思いました。

水路の「如泥石」に話は戻ります。横浜町を流れる小さな水路に「如泥石」があるということは、昔、ここが宍道湖岸だったということになるのでしょうか。

■（上段）横浜町で見つけた如泥石。（下段右）布志名宍道湖岸の如泥石。（下段左）小林如泥の記念碑。

ぐるりと周辺を見渡し、当時の宍道湖の広さと美しさを想像しました。

続いて、広い雑賀町を歩き回りました。雑賀小学校の近くで、民家の塀から樹木が飛び出ているのを見つけました。木を切り落とすことなく残してあります。幹の形に合わせて塀を作ったのか、木が生長してしまったから塀を切り落としたのか、いろいろと想像してしまいました。どっちにしても結構面倒な作業だと思うのですが、住人の樹木を大切にする気持ちが現れているなと思いました。

家の角に、その家の人が設置したと思われる看板も見つけました。ルール・マナーを守りましょうという内容です。丁寧な文章で五行にわたって切々と語られていました。看板を設置した人、相当困っていたのでしょう。

## 練炭は燃料だ！

第一回目の街観察から数日後、先日訪問できなかった関西煉炭有限会社に行ってみました。

ガラス張りの玄関から中をのぞいてみると、今日は開いているみたいです。

「すみませーん。島根県立大学短期大学部のものですが……」

「はーい」

私たちがお店に入ると、奥さんがにこやかに出迎えてくださいました。私たちが取材をお願いすると、

「あいにく、今主人は出かけていてねー。私でよければ……」

と、私たちにお店に置いてあるものについて、いろいろと説明してくださいました。

このお店は入ってすぐのところに練炭が入った袋がいくつも積み上げられています。わざわざ奥さんが練炭を袋から出して見せてくださいました。練炭は色が黒く筒の形をしていて、上部にはいくつか穴が開いていました。「練炭」という言葉は知っていましたが、実際に見たのは初めてで、とても新鮮な体験でした。

■（右）（中）塀から飛び出た木。（左）マナーを守ろうという看板。

練炭は燃料として使われるもので、主に石炭から作られます。昔は各家庭で、熱源として暖房器具や調理に使われていました。このお店でも十年くらい前まで練炭を作っていましたが、今はもう作っておらず、ここにあるのは他店から仕入れたものだそうです。

私たちが練炭を興味津々で見ていると、奥さんが何やら黒いボールのようなものを持って来られました。

「あ！　あれは！……」

私たちはそれを見て、店の裏の工場にずらりと並べてあった「黒くて丸いもの」を思い出しました。

「これは、〝炭団（たどん）〟というものなんですよ」

奥さんの話によると「炭団」は木炭の粉で作られた燃料で、こたつや火鉢に使われているそうです。私たちが先日外から見たのはまさしくこの炭団で、このお店では今でもこの炭団を作っておられるそうです。

また、炭団を入れて使用する火鉢も見せていただきました。

「ここにこうして炭団を入れて……」

奥さんは火鉢の使い方を実演して見せてくださいました。炭団に火をつけて火鉢に入れ、あとは炭団を継ぎ足していくだけで火は燃え続けます。炭団はひとつで二十四時間持つと聞き、そんなに長持ちする炭団って便利だなと思いました。

このほか、「豆炭」というものも見せていただきました。豆炭は練炭の一種でレモンのような形をしています。ほりごたつや足温器である「あんか」に使われます。この豆炭は松江の名物である堀川遊覧船のこたつにも使われていると聞き、驚きました。意外に私たちの身近なところで練炭は活躍しているのです。

関西煉炭は八十年の歴史がある店で、現在のご主人は二代目だそうです。昔は従業員の方が二十人くらいおられたそうですが、今はご主人と奥さんと従業員の方一人と、三人でお仕事をされています。関西煉炭という名前は「関西で一番を目指す」という意味を込めて名付けられたそうです。

今回、関西煉炭を訪れてみて、駅前にこのような昔ながらの燃料である練炭や炭団を守っているお店があることに驚きました。練炭は言葉だけは知っていましたが見たのは初めてで、炭団や豆炭にいたっては見るのも聞くのも初めてで、このような燃料が昔使われていたことを知ったことは、私たちにとって大きな発見になりました。なぜか、こうした練炭や炭団がこれからも残っていってほしいと思いました。

今回の街観察で私たちは今まで知らなかった「文化」をたくさん見つけることができました。私たちの暮らす街にあるのにその存在を知らなかったものばかりで、「へー、こんな文化もあるのか」と驚きの連続でした。街観察を通して、私たちの身近なところにはこのような「おもしろい」文化がたくさんあることを知りました。

（うの・あずさ＊おむろ・きみこ＊とみた・みなこ／文化資源学系二年生）

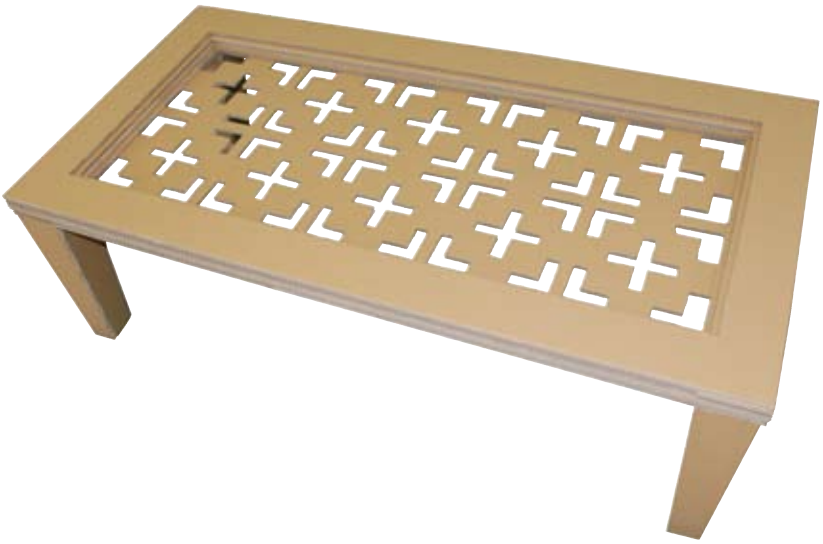
■（上段）関西煉炭正面。（下段右）炭団。（下段中）練炭。（下段左）豆炭。

# 空間をデザインする

## ◎ カフェの家具を原寸大で制作 ◎

一つひとつの BOX の組み合わせを自由に変えることができ、いろいろな雰囲気を持つ空間をつくり出せます。
生活文化デザイン系２年生
高橋　真実子

カフェの２階は、空のイメージで考えたので、それに合うような雲の形でデザインしました。足の形で作ってあります。
生活文化デザイン系２年生
田口　千尋



光と影を楽しむカフェをイメージして、光を通し、影をつくり出すテーブルを作りたいと思い、中国格子をモチーフにデザインしました。
生活文化デザイン系２年生
中濵　陽子

楕円形のテーブルを置きたいと思い、この家具を作りました。こだわった所は、テーブルの下にさらに天板を置いて物を置けるようにしたことです。また脚の所を天板にそうようにデザインしました。
生活文化デザイン系２年生
玉川　恵美

レースや花束を巻いていた和紙を再利用して作りました。何枚も重ねてあるので、場所によって色の見え方が違います。光の見え方に影響が出ないように四隅を棒などで支えるのを避け、ガーデニング用の細いワイヤーで支え、柔らかくあたたかい雰囲気を出すようにしました。
生活文化デザイン系２年生
奥原　久美子

見た目は小さな小包みのようで、ほんのりとした明かりであたたかい空間をつくり出すようにしました。
生活文化デザイン系２年生
高橋　真実子

# 光と影をデザインする

## ◎ 部屋の照明を制作 ◎

この照明は、２色のレースで光の通し方や、影のでき方に変化をつけました。また、レースのやわらかい印象に２種類のチェーンでインパクトを与えています。
生活文化デザイン系２年生
田口　千尋

ぼんやりとした明かりを作りたかったので、紙粘土でかまくらのような照明を制作しました。床をつたって光が広がります。
生活文化デザイン系２年生
中濵　陽子

# 編集後記

昨年に引き続き『のんびり雲』に関わることができたことを嬉しく思います。昨年は、「島根ってどんなイメージ？」という題で記事を書かせていただきました。どんな記事かは、見返すなり買うなりしてください（笑）。今回は、昨年の無念を晴らすかのように多くの取材に同行させていただきました。しかし、私がしたのはあくまでも「同行」。今回私が書いた記事は……やっぱり昨年と同じアンケート集計モノ。

規模は小さくなりましたが、やっぱり集計は大変でした。でも、みんな私には想像もつかないような発想で、あのありえない味を表現してくれ、楽しく読むことができました。みんなありがとう。でも、記事にあんまし載せなくてごめん。そして、鹿野先生、残飯処理のごとくいっぱい食べてくださってありがとうございました。

皆さんも、オーストラリアに行った際は、話のネタに「ベジマイト」はいかがですか。（南央美）

雑誌の編集に生まれて初めてたずさわりました。本当に、いい経験ができたなぁと思います。私は特集ページの記事を担当させてもらい、「梶川理髪館」の取材をしました。初めての取材で、一週間も前から緊張していました。資料を何回も読んで、取材に臨みました。

いざっ、取材！と意気込んでいた私を梶川さんご夫婦は温かく迎えてくださいました。おいしい抹茶をいただき、高級なバーバーチェアでくつろいで、お宝もさわらしてもらいました。それに、お話し上手のご主人に面白い話をたくさんしていただいて……すっかり私たちのほうが楽しませていただきました。

ただ、残念だったことが一つ。梶川理髪館はそのコレクションだけでなく、「顔剃りエステ」という女性客に人気のサービスがあるんです。せっかく行ったなら体験したかった……。編集長！　また連れて行ってください！〈笑〉（野々芳）

街歩きは、二日で終了したように記事にまとめているけれど、本当は七回くらい街を回ってネタを探しました。今回は商店だけでなく看板や門石など、道端にあるオモシロイものも見つけようと意気込んで始めたのですが……。なかなか思うように見つけることができず苦労しました。六月、七月の暑い時期だったので、歩いていると意識が朦朧とし始めて、熱中症になりかけたほどです。

しかしその中で、やっと見つけた練炭屋さんでは、突然お邪魔したにもかかわらず冷えた麦茶を出してくださり、丁寧に説明してくださいました。紋章屋さんでは、今は使っていない道具まで奥から引っ張り出して、熱心に説明してくださったのでとてもわかりやすかったです。おかげで、なんとか記事を完成させることができました。

街歩き後にお蕎麦を食べに行きました。たっぷり歩いてお腹ぺこぺこ。とてもおいしかったです。また食べに行こう！　ついでに街歩きもしよう！――と思いました。（街の観察隊）

私が『のんびり雲』の編集部員になろうと思ったのは、大学で勉強だけでなく何か形に残ることをしたいと考えたからです。私はサークルに属しておらず、土日や学校のない日はバイトをするのみで、「これではいかん！」と一念発起し、『のんびり雲』の編集部員になりました。

私は文を書くのは苦手ですが絵を描くのは好きなので、ぜひ漫画を……ということで描かせていただいたのですが、これがまた難しかったです。「文化的な内容」という抽象的な課題に加え、四ページという非常に少ないページ数で何を表現出来るのか……。一ページに一週間かかったことも、ペンを二本ほど壊したのも、今となってはいい思い出です。私が描いた漫画で少しでも読んでいる方が何かを思ってくだされば幸いです。

取材に同行させていただいたのもいい思い出になりました。梶川理髪館のご主人の情熱に胸打たれ、そしてトチの実アイスという珍しいものが食べられたことも大変嬉しかったです。色々な方に迷惑をかけながらも完成してよかった……。ありがとうございました。（菜保）

『のんびり雲』は島根県立大学短期大学部・総合文化学科の学生と教員が共同制作する文化情報誌です。合い言葉は「小さな文化に注目」「地域の文化資源を掘り起こす」「世界に目を向ける」です。

みなさまのご感想・ご提案をお待ちしております。


のんびり雲　第２号

2008 年 10 月 20 日発行

編集　「のんびり雲」編集部
　　責任者：大塚　茂
　　e-mail: s-otsuka@matsue.u-shimane.ac.jp

発行　島根県立大学短期大学部
　　松江キャンパス
　　総合文化学科
　　〒690-0044
　　島根県松江市浜乃木７丁目 24-2
　　TEL．0852-26-5525（代表）
　　FAX．0852-21-8150

印刷　今井印刷株式会社

挿絵　奥野明実

制作協力　小倉佳代子

制作アドバイザー
　　鹿野一厚　　小泉　凡